



Via Latina 22

2025年2月 338号

総本部よりのお知らせーマリア会

内 容

東アフリカ地区での終生誓願式	1
インド地区での司祭叙階式	2
シャミナード国際神学校への年次訪問	4
ガーナで新しい共同体を開設	4
“Adèle de Batz de Trenquelléonと共に希望に生きる”	6
“全てが過ぎ去り、天国だけが残る”	8
2023と2024年に国際資料室（AGMAR）書庫に目録化された書籍	9
SMとFMIの総長評議員会がローマに集まる	10
ローマで祝った創立者の記念日	10
Via Latina 22で2025年1月22日の記念日の式典	11
FMIの臨時総会の機会に	11

東アフリカ地区での終生誓願式

2024年12月14日、何百名もの人たちがザンビア、ルサカのマテオ男子中学校での誓願式ミサに集まりました。Gabriel Chilinda 士がマリア会で終生誓願を宣立しました。同じ機会に、マリアニスト家族が Bernard Ombima 師の誓願 25 周年を祝うためにこれに加わりました。

地区長の Stephen Wanyoike Mburu 師は、その説教の中で、イエスとその母マリアに常に中心を置くよう Gabriel 士と Bernard 師にチャレンジし、励ましの言葉を送りました。これからの歩みがスムーズで明確ではないように見える時でも、常にイエスに従い続けることを望み、切望するようにです。さらに彼は、私たちの生活の中で、また信仰の試練のときにな

さねばならないことにおいて、私たち全てにとって素晴らしい手本である聖母マリアを模倣することを彼らに思い起こさせました。私たちは、とても優しく愛に溢れておられるマリアを通して、イエスへと向かわなければなりません；すなわち、マリアがおられるところではどこでも、私たちはそこでイエスを見出すのです。



左より：Stephen W. Mburu 師, Gabriel Chilinda 士,
Bernard Ombima 師と Michael Otieno 師

マリアニスト家族、Gabriel 士の家族、そして Bernard 師の友人たちは、ミサの後、食事と催しを分かち合うため集まりを持ちました。

インド地区での司祭叙階式

マリア会とインド地区にとって、Showraiah Ravulapalli 助祭の新たなマリアニスト司祭の叙階式に参列するのは喜ばしいときでした。叙階式は 2025 年 1 月 11 日、インド テランガーナ州、カンナム司教区の Jacob Gapp Nivasam 共同体で執り行われました。Jacob Gapp Nivasam 共同体はこの式典を立派に計画し準備しました。この叙階式は、ここで行われるマリアニストの最初の重要な式典だったので、特別に意味深いものでした。Showraiah 助祭は、カンナム教区、Sagili Prakash 司教によって司祭に叙階されました。司教は、司祭職のもつ様々な面と、謙虚な羊飼いとして神の民に奉仕する召命を強調しました。

司教は司祭職の“召命”の重要性を強調しました。彼は、司祭の召命はその人が修道会に入会する時に始まるのではなく、むしろ母親の胎内に宿る前に始まることを説明しました。修道者は、主はご自分が呼ばれる人々を支え、強めるために常にそこに居られるという信頼を持って、召命を受け入れるということを分かち合いながら話を続けました。司祭と修道者は自分自身の能力に依り頼むのではなく、神のみ旨に頼まなければなりません。神の招きは、すべてを神の名において、神の為に行うことです。司教は、神の愛と神の慈しみにのみ頼るよう新司祭を励ましました。彼は、全ての司祭たちが、自分自身の言葉を語るのではなく、エレミヤの言葉に従って、神が司祭たちの口に置かれた言葉を宣べ伝えるよう思い起こさせ

ました。司教は、アッシジの聖フランシスコを引き合いに出しながら、司祭たちが謙虚で聖なる者であるよう励ましました。司教は Showraiah 神父にお祝いを述べ、彼に祈りの約束をしながら祝辞を終えました。



Showraiah Ravulapalli 師 (中央), 家族とマリア会の兄弟たちとともに

約 1000 名もの人たちがこの叙階式に出席しましたが、そこには 25 名のマリア会員と FMI のシスターたちがいました。SM 会員の中にはインド地区長、Prakash Kujur 士と彼の評議員会メンバー：Ignase Arulappen 師、Basant Kujur 士、Pratap Guria 士そして Prasad 師が含まれていました。典礼とその他の準備は、共同体の会員たち、Jacob Gapp 中学校の先生たち、ボランティア、巡回教会の信者たち、そして信徒マリアニスト共同体によって素晴らしく計画されていました。



新しく叙階された Showraiah 神父は、初ミサを 2025 年 1 月 13 日に彼の地元小教区、パティバンヅラで執り行いました。小教区はこの機会を緻密に計画しました。今年には 1925 年に小教区が設立されてから 100 周年を祝う記念の年でした。Showraiah 神父の家族はこの式典に参列したマリアニストたちと他の招待者を手厚く迎えました。私たちは、Showraiah 神父が司祭として新たな役務に取り掛かるので、彼のために祈り続けます。

シャミナード国際神学校への年次訪問

1月10日から16日にかけてローマのシャミナード国際神学校への教会法上の年次視察訪問が行われました。この視察訪問は、東アフリカ地区長、Stephen Wanyoike Mburu 師と総本部霊生局長、Pablo Rambaud 師によって実施されました。

例年通り、この2名の訪問者は神学校共同体の日程に沿って祈りの時間や食事など神学校のスケジュールに合わせて彼らと生活を共にしました。この訪問は養成者、Miguel Ángel Cortés 校長と Hervé Dagbo 副校長との会議で始まりました。会議の間、養成者は準備した報告書についてコメントしました。訪問日程の間に、訪問者は神学生、および養成者と個別に面談しました。



今年の神学校共同体は13名の修道者（11名の神学生と2名の養成者）で構成されており、それぞれマリア会の異なる7行政単位に属しています。イタリア語を学び話すことへのチャレンジに加え、共同体は常に多文化共存の課題に向き合っていますが、そのことは同時に恵みとしても体験されています。訪問者は彼らの温かい歓迎に感謝し、また自分たちが受けている養成（司牧的、マリアニスト的、神学的養成プログラム）について神学生たちが感謝していることを強調しました。

この訪問の終わりに、委員会はその報告書を先ず一緒に総長評議員会と養成者に、そして次に、自分たちが気づいたことや将来への提案を共に話し合った神学校共同体に発表しました。この報告書はゾーンの全議長と各行政単位の責任者に送付されました。

ガーナで新しい共同体を開設

2025年1月5日、主のご公現の祭日に、トーゴ地区は4年間に渡る意見交換、会議、そして祈りを経て、ガーナの北東にあるナブロンゴ・ボルガタンガ司教区のガールに新しい共同体を公式に開設しました。マリアニストがここに来たのは、この地域の司教の招待によるものでした。



左より：マリア会の Jules Along 士, Richard Abingya 師, Jonas Kpatcha 師、
Alfred Agyenta 司教, マリア会の Patrice Agao 士と Frédéric Bini 士

先駆者となる会員、Frédéric Kodjo Bini 士と Patrice Médesso Agao 士は、教区長、Alfred Agyenta 司教が司式したミサの中で公式に任命されました。共同体の3番目の会員は東アフリカ地区の Philipp Adoka Okisai 士で、彼はザンビア、ルサカで今、学業を終えるところです。司教と共にトーゴの地区長、Jonas Kpatcha 師とガールの聖天使小教区の司祭 Richard Abingya 師が共同司式をしました。またこの式典にはトーゴ地区財務担当の Jules P. Along 士、ナブロンゴ・ボルガタンガ教区のカトリック教育の地区責任者、シスター Bernardine Pemii と聖ビンセントチャリテイ子女会の彼女の共同体のメンバーも出席していました。さらに多くの信者たちが出席していました。

Alfred 司教は説教の中で、ガールでのマリア会修道者の使命を強調しました：“彼らはトーゴで仕事がないから、あるいはガーナが教師不足だからここに来た訳ではありません。彼らはイエスを証する福音宣教者としてここに居るのです”。この使命は基本的にガールのモリン神父記念中学校での教育活動を通して行われます。この式典は小教区司祭館での兄弟的分なお祝いで終了しました。



Alfred Agyenta 司教がマリアニスト共同体の建物を祝福する

“Adèle de Batz de Trenquelléon と共に希望に生きる”

アデルは、フランス革命が勃発する数週間前、1789年6月10日に生まれました。ド・バツ・ド・トレンケレオン家は革命によってスペイン、ポルトガル、そして最後にサン・セバスチャンでの亡命を余儀なくされました。サン・セバスチャンで、彼女は1801年にフィガロールに帰る前に初聖体を受けました。幼少期のこの彼女の苦難の時期は、フランス王のために戦い、イギリスへの亡命を余儀なくされた父との関係において、また、カルメル会員になることを望んで主に自分を明け渡すことのうちに、さらに平和と家庭的な家に戻ることを望むことのうちに、神への希望と信頼を特徴としました。

「La Petite Société」（小さき会）が結成されたとき、その目的は明確でした：「この会の目標は良き死を遂げること」であり、また聖母マリアの保護の下に神に仕えるよう他の人々を鼓舞すること、そしてその人々を救うことでした。この永遠のいのちへの希望は、アデルの周りの人々に常にあり、誰の目にも明らかなもので、天の故郷に到達するという希望を育んでいました。

そのためには、私たちへの神様の御心に協力して「聖なる生活」を通して完成の道に進歩しなければなりません。アガト・ディシエに対して、彼女は次のように書いています：「すぐに過ぎ去る世俗を軽んじましょう。世俗に私たちの心と希望を結びつけないようにしましょう。救いの道を駆けていく私たちの多くの友人に倣って、今まで以上に私たちの神なる主を愛しましょう。」そしてロロット・ドゥ・ラシャペールへ次のように書いています：「心と精神によって天国に昇りましょう。地上のことは放棄しましょう。私たちの神なる贖(あがない)主が私たちのために場所を準備されに行かれた永遠のしあわせの方へ、私たちのすべての希望とすべての願望を向けましょう。」



アデルは、自分の弱点を克服するための個人的な力不足を認識しており、前進するために神の恵みを頼りにしていました：「短い期間で自己改善が出来なくても落胆しないようにしましょう。多くの場合、一つの欠点を直すのに長い時間がかかります。主は、私たちが自分の弱さと、どこまで私たちが惨めなのかを知るために、それをお許しになるのです。主の限りない慈悲とお恵みの助けにだけ私たちの希望をおくようにしましょう。」（アガト・ディシエ宛、1811年7月24日）「…私たちの不足はとても大きいものです。私たちはただ神さまにだけ期待しています。」（エミリー・ドゥ・ロダ宛、1819年9月29日）

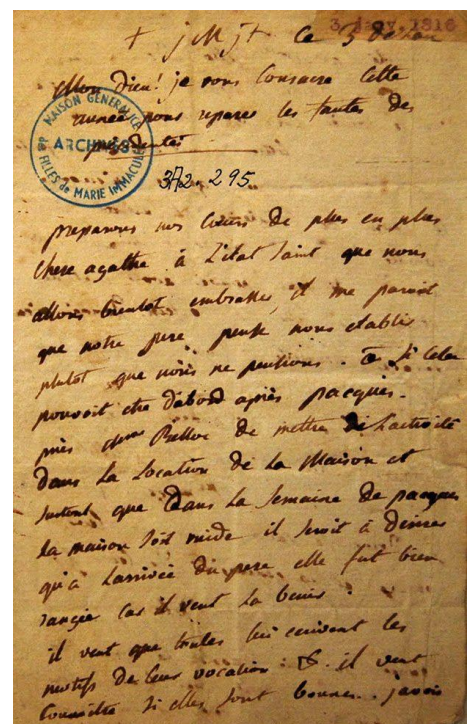
「悪魔が、私たちの回りを回っています。親愛なるアガ

ト、神さまが私たちを助けてくださるといふ、確固とした希望をもちましょう。」(アガト・デイシェ宛、1807年2月5日)。

神の慈しみへの彼女の希望は計り知れないものでした：「神さま、私の惨めさを憐れんでください。」 「もし、私が自分を信じるようなことをすれば、意気消沈するようなことになるでしょう。そういうことではなく、私はすべてを神さまの慈愛に期待したいと思います。神さまは、本当に悔い改める時には常に赦す用意があります。」 (アガト・デイシェ宛、1810年11月14日) この望んでいた救いは自分自身への引きこもりではなく、宣教者たる決心となるのです：シャミナード師は、「コングレガシオンの目的を私たちに示してください。その目的とは、各自がその身分において小さな宣教者になることです。正直申し上げまして、この宣教者という言葉は感激です。ですから、私たちは可能な限りのすべての手段によって、神の栄光と隣人の救いを獲得すべく定められていると考えましょう。従ってこのようにして、私たちが選ぼうと望んでいる聖なる身分のための修練期を過ごしましょう。」 (アガト・デイシェ宛、1814年10月13日) 「各アソシエイトは、他の若い女性を神の方に引き入れようと試み、神に仕え自分自身を救いたいという切望で彼女を鼓舞して、できるだけ他の若い女性を捜し出すよう努めなければならない。」 (小さき会の規則、第11号)。

メール・マリー・ド・ラ・コンセプションの人生は“長く静かな川”ではありませんでした：彼女の父の病気、彼女が会の発展のために頼りにしていた数人の姉妹の死、彼女自身の健康、これらすべてが、信頼して苦しむキリストと一体となって捧げられていました。テレーズ・ド・ジェズ・ヤンナッシュを奪う病気の発表が発表されたとき、彼女は次のように書きました。「私たちの涙を一緒にしましょう... 私の心は悲しみに沈んでいます。でも、希望をもたない人のようにほしないようにしましょう。目をあげましょう、天国が私たちの祖国です。聖人のような私たちのメール (mere) は、私たちよりも一足先にその祖国へ旅立ちます。少しすれば、そうです、私たちは天国でメールと再会するでしょう。メールが私たちに示してくださった、柔和、忍耐、愛徳、謙遜の良い模範の香りに導かれて、メールの後に従いましょう。」 (シスター・ドジテ・ガティ宛、1823年10月2日)。「...神さまのお恵みとお助けがあれば、すべてを希望することができます。」 (アガト・デイシェ宛、1806年9月25日)

会が経験した困難の中で彼女はしたためました：「スール・ナティヴィテをトナンにおくらざるをえなかった時、私はコングレガシオンをマリアさまのみ手に委ねました。コングレガシオンが駄目になりましたが — 人間的な見方からすれば — 私は神さまとマリアさまを信頼し



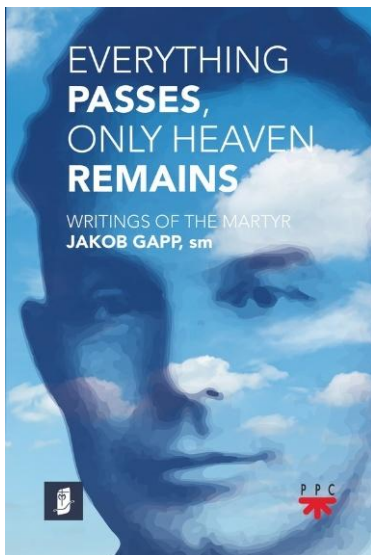
ています。」(メール・ルイ・ドゥ・ゴンザグ・ポワトゥヴァン宛、1825年2月5日)。そして、彼女にかかっている重圧に直面して、彼女は1820年11月20日にエミリ・ドゥ・ロダにこれらの言葉を送りました：「そうです、親愛なる姉妹、私たちの重い職務と共に私たち自身を、大変慈愛深くいらっしゃる私たちの主の御腕の中に委ねましょう。」

神だけが、私たちに満ち足りた生命を与えてくださいます：「最愛の神さまだけに私たちの希望、望み、喜びをおきましょう。神さまだけが、神さまのためにだけ創られた私たちの心を、充たすことがお出来になります。」(アガト・ディシェ宛、1810年6月10日)

彼女が若くして準備していた殉教、それを彼女は日常生活、特に病気を通じて体験しました。すべては、1828年1月10日の死にあたって彼女が発した：「ダビデの子にホサンナ」という希望と信仰の叫びのうちに完成しました。

彼女が手紙の冒頭に書き、あるいはその手紙で頻繁に繰り返される合言葉を、私たちは自分自身のものとすることができます：「おお、わが神よ、私の避難所と希望となってください!」；「マリアの聖なる御名によって願います!」；「主に期待する者は、決して打ち負かせられません。」；「自分自身には何も期待しようではありませんか。すべては、私たちを強めてくださる方に。」

“全てが過ぎ去り、天国だけが残る”



全ての共同体は「全てが過ぎ去り、天の国だけが残る」というタイトルの Gapp 神父に関する一冊の本を既に受け取ったか、或いは近いうちに受け取るでしょう。皆さんがよくご存じのように、第2次世界大戦前と大戦中、私たちの同僚、福者 Gapp 神父はナチの思想と体制に反対し、そのことを表明しました。このことが、多くの同僚会員と彼が話すのを聞いた人々から彼が誤解される原因となりました。そのような訳で、彼は自分の生国オーストリアから、先ずフランスに、それからスペインに逃れなければなりませんでした。彼はこの2つの国でしばらくの間、幾つかの私たちの共同体で生活しました。あちこちで彼は自分に耳をかす人には誰にでも自分のナチズムへの反対を繰り返し続けました。ナチ当局に騙されて、彼はフランスとスペインの国境で捕まり、ベルリンへ連行されました。その町での裁判で、彼は自分の考えと信仰に忠実に留まったため、死刑を宣告され、1943年8月13日、ギロチン刑を受けました。

スペイン語、英語、フランス語で出版されたこの本は、私たちにとって非常に重要なもの

です、なぜなら福者 Gapp 神父の物語は 20 世紀におけるマリア会の歴史であるし、また非常に多くの国のとても多くの人々の歴史であるからです。

彼の姿、彼の勇気ある態度、そして彼の生涯は私たちの中で良く知られています。数年前に José María Salaverri 師(SM)は「真理への情熱—ナチズムに直面して—」(原文スペイン語)という題名の Gapp 神父の伝記を出版しました。今日ここで皆さんに紹介する本の著者は Emilio de Cárdenas 神父(SM)です。

この著作は 2 つの部分から構成されています。最初の部分は、Gapp 師の人物像とその時代についてより広くて深い知識を与えてくれる歴史に関わる紹介です。第 2 の部分は私たちが現在まで彼について知っている全ての著作物を集めています。Gapp 師の最後の手紙の一つがこの本の表題となる文章を含んでいます。これら最後の 2 通の手紙とベルリンでの Gestapo による Gapp 神父への尋問記録は、例外的な歴史的・霊的価値のある文書です。全マリアニストはこれらの文書を読んでおく必要があります。(文書 E122 から E127)

私たちは皆さんがこの本を読むよう強くお勧めしますが、同時に、この本を皆さんの周りの人たちに知らせるようお願いいたします：先生方、上級生、家族、マリアニスト家族メンバーなどに。私たちはまたこれがあなた方を夢中にさせる読書でありますようお願いしています、そして私たちはその普及に貢献するすべてについて皆さんに感謝します。

もし、行政単位でも個人でも、更に部数をお望みなら本部事務局にコンタクトしてください：gensecsm@smcuria.it 感謝！

2023 と 2024 年に国際資料室 (AGMAR) 書庫に目録化された書籍

2023 年の間に、AGMAR 書庫はマリア会修道者によって書かれたか、或いはマリア会とマリアニストに係るテーマについて書かれた 31 の書籍を受け取り目録化しました。これらは 2023 年に出版されたか、あるいは、それより前に発行されたが今年 AGMAR に届いた書籍です。それで、これら 31 の書籍の内、9 冊の本が 2023 年に発行され、22 冊がそれ以前に発行されました。私たちは次の 3 つのリストを挙げます：最初は AGMAR で受け取った 31 の書籍です；第 2 のリストは 2023 年に発行された 9 の書籍です；そして 3 番目は 2023 年前からの 22 の書籍です。

書類を見るために [ここをクリック](#) してください。

2024 年の間に、AGMAR 書庫はマリア会修道者によってか、或いはマリアニストについて書かれた 34 の書籍を受け取り目録化しました。これらは 2024 年に、或いはそれ以前に発行された書籍ですが、去年 AGMAR に受け取りました。このように受け取った 34 の書籍のうち、3 つが 2024 年に発行され、そして 31 がそれ以前に発行されています。私たちは 3

リストを提供します：最初は AGMAR で受け取った 34 の書籍です；第 2 は 2024 年に発行された 3 の書籍です；3 番目は 2024 年以前の 31 の書籍です。
書類を見るために[ここをクリック](#)してください。

SM と FMI の総長評議員会がローマに集まる

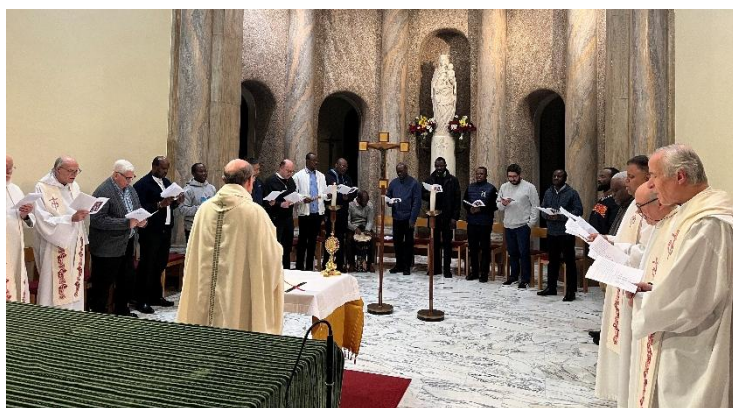


SM と FMI の総長評議員会は、2025 年 1 月 3 日（金）、年 2 回の会議に Via Edoardo Jenner に集まりマリアニスト修道生活について指導者たちが直面している重要問題について討議しました。彼らは 2024 年 7 月に開催された SM の 36 回総会と今月行われた FMI の臨時総会からの洞察、各行政単位への教会法上の視察訪問からのキーとなる所見、そして Horizons と Nazareth 養成プログラムについての最初の意見交換、また、継続中の取組みについて分かち合いました。この会議はまた両方の評議員会に、それぞれの展望を交換し、お互いに学び合い、そして可能な将来の協働分野を探求する機会を提供しました。

ローマで祝った創立者の記念日

今年、私たちは福者シャミナードと福者マリード・ラ・コンセプション（アデル・ド・バツ・ド・トレンケレオン）の、それぞれ帰天 175 周年と 197 周年を祝います。この機会に、2025 年 1 月 19 日、日曜日、ローマ（イタリア）のマリアニスト家族は FMI の汚れなきマリア共同体（Via Edoardo Jenner）に集まり今年の創立者の記念日を祝いました。この日の式典はマリアニスト修道女と修練女たちによってよく準備された晩の祈りの聖歌が特徴でした。総会に参加したシスターたちは、臨時総会が行われたご受難会のセンターから祈りのうちにこのお祝いに参加しました。

Via Latina 22 で 2025 年 1 月 22 日の記念日の式典



2025 年 1 月 22 日、創立者の祝日の機会に、Via Latina 22 の 2 つの共同体（総本部共同体とシャミナード国際神学校共同体）は記念ミサに集まり、その後夕食を分かち合いました。通常、この 2 つの共同体は神のみ言葉の分かち合いを伴う毎月曜日、夜 7 時に一緒にミサ聖祭を捧げていることは注目していいことだと思います。

FMI の臨時総会の機会に

1 月 28 日、ローマで開催された FMI の臨時総会の機会に、Via Latina 22 の 2 つの共同体、総本部と神学校は臨時総会に出席したマリアニスト修道女たちを共同体で歓迎しました。祈りにあてられた最初の時間に、私たちは“希望”というテーマについて一緒に黙想し祈りました。教皇フランシス教書から、また私たちの創立者たちの原典からとられた聖書のテキストが私たちに同伴し、マリアの模範に倣って、私たちが希望の男女であるよう御父への私たちの願いを導いてくれました。



それから、種々の食前酒の時間は、お互いゆっくり挨拶し合い、もう少し良く知り合い、お互いに楽しい会話を交わす機会となりました。私たちが世界各地で一緒に生きてきた多くの兄弟姉妹の思い出を語る言葉は不足しませんでした。

また、多くの機会に分かち合われた共通の福音宣教の経験と良い思い出が、私たちの非公式の会話の中がありました。私たちの二人の創立者に捧げられた今月、彼らが天国の高みか

ら自分たちの多くの子供たちが集まるのを見て満足して微笑んでいると私は確信しています。この集いは、繰り返しますが、マリアニスト家族と一緒に成長する機会でした。



福者シャミナードへの祈りの意向

私たちは、ボルドー、マリアニストマドレーヌ聖堂共同体の Robert Witwicki 神父の完全な治癒のため福者ギョーム・ヨセフ・シャミナードに対するノベナの祈りをお願いします、彼は攻撃的な脳腫瘍で苦しんでおり腫瘍が悪化の段階にあります。この意向はマドレーヌ聖堂共同体から依頼されたものです。

注意喚起

Via Latina 22 は、世界のマリア会の生活に関するニュースと一緒に届ける総本部の月毎の会報です。これは全てのマリアニスト修道者に各月 1 日に送付されます。私たちは記事や写真を提供する皆様に、それらを各月の 25 日前に総本部の José Ignacio Iglesia 士宛て (gensecsm@smcuria.it) に送付されるよう要請致します。それは次の月の発行版に載せるようにするためです。皆様のご協力に感謝します。

最近の総本部通信

- 訃報：1-2 号
- 1 月 14 日：新しいワイン、広報 11 号、3ヶ国語でマリアニスト研究センター（CEMAS）の指導者、ゾーン会議の議長、行政単位の責任者、養成所の責任者、WCMF のメンバーに CEMAS の調整者、José Ignacio Iglesia 士から送付
- 1 月 20 日：マリア会 3 部門 161 号 - 2025 年マリアニスト連帯基金と 2025 年マリアニスト養成基金の配分、財務局長、Jérôme Balakiyema 士から 3ヶ国語で全マリアニスト修道者へ送付
- 1 月 21 日：JPIC オンライン会議、財務局長、Jérôme Balakiyema 士から 3ヶ国語で全行政単位の責任者と財務補佐に送付
- 1 月 30 日：シャミナード国際神学校への視察訪問報告書、霊生局長、Pablo Rambaud 師から 3ヶ国語で行政単位責任者に送付

総本部日程

- 2 月 6 日 - 24 日：霊生局長、Pablo Rambaud 師と教育局長、Dennis Bautista 士がインド地区を訪問
- 2 月 9 日 - 18 日：総長、André-Joseph Fétis 師と財務局長、Jérôme Balakiyema 士がフランス、ボルドーのマドレーヌ聖堂を訪問
- 2 月 19 日 - 27 日：総長、André-Joseph Fétis 師と財務局長、Jérôme Balakiyema 士がスイス共同体地域を訪問